

内容物が氷晶核として作用していると考えられる。SCPより高い温度でも冷却期間を長くすると死亡率は高くなった。例えば-10°Cで冷却した場合の死亡率は5分で22%, 10分で23%, 15分で93%であった。この場合の死亡要因は代謝系の異常か感想によると考えられる。

- 1) 千葉県衛生研究所 2) 元北海道大学農学部  
3) 北海道大学低温研究所

**エイコサペンタエン酸 (EPA) 並びにその自動酸化生成物のマウス致死並びにヘモグロビン酸化作用について** 佐二木順子<sup>1)</sup>, 高橋勝弘<sup>1)</sup>, 浜崎智仁<sup>2)</sup>, 衛生化学, 38(1), 57-62, 1992.

EPAならびに酸化EPA (37°Cにて1週間振とうによる自動酸化生成物, EPA-Ox) のヘモグロビン酸化作用, マウス致死作用について調べた。EPA酸化物を含む分画がEPAに比べ7.4倍のヘモグロビン酸化能を示した。腹腔内投与24時間におけるマウスのLDはEPA酸化物4.2mg, EPA7.3mgであった。なおマウス致死発現時間はEPA酸化物の方がEPAに比べ早かった。なお $\alpha$ -トコフェロールの添加は, EPAによるマウス致死作用に何ら効果を示さなかった。

- 1) 千葉県衛生研究所 2) 富山医科薬科大学

**千葉県における紅斑熱群リケッチア症** 海保邦男<sup>1)</sup>, 時枝正吉<sup>1)</sup>, 田中 寛<sup>1)</sup>, 川村明義<sup>2)</sup>: 感染症学雑誌, 66(2), 201-205, 1992.

千葉県では, 1987年に初めて紅斑熱患者の発生があり, 以後1990年までに, 9名の患者を血清学的に確認した。患者発生地は, 県南部の天津小湊町, 勝浦市, 大多喜町であり, 発生時期は, 6月~10月であった。一方, 本県での, つつが虫病の発生は, 10月から翌年の2月であり, 両者の発生時期には違いがあった。

患者血清は, 日本で分離された紅斑熱群リケッチアであるYH株に対して, 最も高い抗体価を示すものの, 他の紅斑熱群リケッチアとも高い交差反応を示した。これより, 血清学的に患者を確認する場合は, どの紅斑熱群リケッチアを用いても可能であると考えられる。

- 1) 千葉県衛生研究所 2) 元東京大学

**Production of haemagglutinins and pili by *Vibrio mimicus* and its adherence to the human and rabbit small intestines *in vitro*** Masako UCHIMURA<sup>1)</sup> and Tatsuo YAMAMOTO<sup>2)</sup>: FEMS Microbiology Letters, 91, 73-78, 1992.

下痢患者由来の*V.mimicus* (*V.m*) 株は, ホルマリ

ン固定ヒト回腸及びウサギ空腸粘膜に粘着することが, 走査型電顕を用いた観察で示された。*V.m*株は, 新鮮分離ウサギ空腸にも粘着したが, 粘着率はホルマリン固定ウサギ空腸を用いた場合に比べ低く, 40%程度であった。

また, *V.m*株はヒト赤血球に対する菌体結合性のHAを産生した。HA産生量は培養時間に影響を受け, 3時間培養菌で高いHA価を示し, 20時間培養後は低い値を示した。3時間培養菌と比較すると, 高いHA価を示す株では小腸絨毛表面への粘着能が高く, HA産生性と粘着能との間には有意な相関が認められた (*t*-test, *P*=0.05)。以上の結果は, *V.m*株において, HAが菌の小腸粘着 (付着) に何らかの役割を果たしていることを示すものである。

- 1) 千葉県衛生研究所 2) 順天堂大学医学部

## 2. 学会発表 (口演, 示談等の抄録)

**室内塵中ダニ類の薬剤感受性に関する研究(2)製品試験からみた問題点** 森 啓至, 藤曲正登, 林 晃史: 第43回日本衛生動物学会, 1991. 4. 2~3. 神戸市.

近年各種殺ダニ製品には, 紙・布・マットなど剤型が多様化が見られる。今回我々は, 剤型による効力差を見るためpermethrinを用いて, 紙・布・マット製品をそれぞれ口紙・ガーゼ・綿に対応させ, ケナガコナダニ (*T.p*)・コナヒョウヒダニ (*D.f*)・ミナミツメダニ (*C.m*) を供試虫として, クリップ法・培地混入法にて実験を行った。

クリップ法では, *T.p*の48時間後仰天率が口紙 (100%) > 綿 (90.9%) > ガーゼ (80.4%), *D.f*では綿 (87.9%) > 口紙 (80.5%) > ガーゼ (72.1%) の順であったが, *C.m*には有効とは言えなかった。

培地混入法では, *T.p*より*D.f*に対しての増殖抑制率が高く, 各剤型間では*T.p*に対してガーゼ, 綿の効力が低く, *D.f*に対しては, 綿の効力が他に較べて低かった。また, クリップ法との比較から直接的接触効果を期待する製剤に対して, この試験法は, 使用目的を満たすとは言い難いと考えられる。

**千葉県における急性出血性結膜炎ウイルス (CA24ウイルス変異株) の分離 (1988~1989)**

篠崎邦子<sup>1)</sup>, 山中隆也<sup>1)</sup>, 時枝正吉<sup>1)</sup>, 市村 博<sup>1)</sup>, 酒井利郎<sup>2)</sup>, 吉井孝男<sup>3)</sup>: 第32回日本臨床ウイルス学会, 1991. 6. 5~6, 東京.

1988年8月から10月にかけて, 県内茂原地区に局限して急性出血性結膜炎患者の発生がみられ, 22検体中4検

体からCA24ウイルス変異株(CA24V)を分離した。さらに、1989年8月下旬から11月上旬にかけて、県内銚子、佐倉、茂原の3地区で流行性結膜炎を主症状とした眼疾患の流行があり、71検体中43検体からCA24Vを分離した。1989年3地区での分離株各5株(計15株)は、シンガポール株(EH24/70)およびガーナ株(NV-87-37)の抗血清を用いた中和試験の結果から、抗原的に同一のものと考えられた。また、分離株(Chiba/385/89)とシンガポール株およびガーナ株によるブラック交差中和試験では、分離株はシンガポール株、ガーナ株と抗原的に差が認められた。1989年5月から6月に採血した茂原地区中学2年生のCA24V(EH24株および分離株)に対する抗体調査では、中和抗体陽性者5名、抗体保有率2.5%と低率であった。

- 1) 千葉県衛生研究所
- 2) 千葉県中央食肉衛生検査所
- 3) 国立予防衛生研究所

### 千葉県における患者発生およびブタH1抗体保有状況

小川知子：第26回日本脳炎ウイルス生態学研究会，1991. 6. 13~14. 高知市。

千葉県における日本脳炎の患者発生の報告は、1972年以降10年間は皆無であったが、1982年2名(1名は東京都届出)、1983年2名(1名は東京都届出)、1985年2名、1987年1名(東京都届出)、1990年1名と計8名の真性日本脳炎患者を確認し、東日本では患者の多発県となっている。

1981~1990年の10年間に発生した真性日本脳炎患者8名を調査したところ、患者発生地は1名が県中央の農村部であったが、他7名は東京近郊の東葛地区であった。発病日は8月下旬から9月上旬に6名と集中し、9月下旬と10月中旬がそれぞれ1名であった。ワクチンは、1名が接種してあった。予後は、全治1名、後遺症4名、死亡2名、不明1名であった。また、豚H1抗体保有状況と患者発生の関係について検討したところ、患者発生には、シーズン初めの2ME抗体陽性率の高さと長期間の持続等、すなわちウイルスの活動期間の長さや濃度が大きな要因であると考えられた。

### ヒト血清(1990~1991)のインフルエンザワクチン株と分離株に対するH1抗体価の比較

小川知子、山中隆也：第6回関東甲信越地区地研ウイルス研究会，1991. 6. 20~21. 横浜市。

1990~1991年インフルエンザシーズンに千葉県で分離されたH3型、H1型株とワクチン株について、ヒト血清を用いてHI試験を行い抗体価を比較し、株間の差に

ついて検討した。

流行の主流であったH3型については、ワクチン株A/貴州/54/89、分離株A/千葉/9/91両株間に大きな差はなかった。ウイルスは分離されたものの、大きな流行のなかったH1型については、ワクチン株A/山形/32/89、分離株A/千葉/56/91両株に対しても見るべき差はなかった。またウイルスも分離されず流行もなかったB型については、ワクチン株B/愛知/5/88、B/香港/22/89について比較したところ、流行の前夜で両株間に差はなかったものの、非流行期と流行期ではパターンが著しく異なっていた。このことは、夏~冬期に間に表面に現れないウイルスの浸淫があったのではないかと示唆された。

### 千葉県における最近の患者発生動向の特徴と患者情報の問題点

市村 博：衛生微生物技術協議会第12回研究会，1991. 7. 18~19. 神戸市。

結核・感染症サーベイランスで得られた、千葉県内での最近の患者発生動向の疫学的特徴とサーベイランスシステムによる情報収集、解析にともなう問題点について考察した。患者発生の動向は、東京都に隣接した地域性のなかで、人の移動と共に患者発生が見られたが、近年になって、交通機関、殊に車社会の出現や、人の口コミによる、より評判のよい医療機関へ受信する傾向が眼疾患や肝炎、MCLS等に見られるようになり、かならずしも居住地での医療機関で受診することが少なくなり、又、国際空港をもつ成田市周辺の動向も少しずつ変化をみせている。システムの中での問題点としては、マンパワー不足による解析の不充分さ、定点が過疎というネックにぶつかること、また、還元する情報の速度や内容のレベルなどに問題点の多いことを報告した。

### 感染症サーベイランス事業における小児ウイルス感染症の現状

時枝正吉：第2回関東甲信越微生物検査研究班研修会，1991. 9. 15~16. 館山市。

1991年を中心に県内結核・感染症サーベイランス事業として医療機関より搬送された、小児ウイルス性感染症患者の検査材料についてウイルス分離試験を試みた結果と患者発生の疫学的考察を加えて解説した。

検査結果では年間検査数666検体で分離陽性数は217検体、32.6%であった。特にウイルス性下痢症は市原市内の医療機関を定点にして年間を通して検査を実施している関係で302検体と多く、ロタウイルスを52株確認し、次いで無菌性髄膜炎の全国流行の関係で153検体中108検体(70.6%)、エコー30型を分離し、インフルエンザ98検体

中29検体 (29.6%) でA/H1 (ソ連型) を分離した。またヘルパンギーナ40検体中26検体 (66.7%) 分離し、コクサツキーA群ウイルスを分離同定した。これらの分離ウイルスは全国的な大規模な流行が見られたウイルスと同様な型が分離され、比較的早期首都圏を経て本県に侵襲していること示唆していた。

**魚介類中の不飽和脂肪酸の簡易測定法について**  
佐二木順子, 高橋勝弘: 第28回全国衛生化学技術協議会年会, 1991. 10. 8~9. 広島市。

二枚貝の下痢毒試験に用いられるマウスバイオアッセイに多価不飽和脂肪酸 (PUFA) が影響を与えるため、従来の貝毒とPUFAとの分別定量が必要である。PUFAのヘモグロビン酸化能を測定する方法について検討した結果、本法は迅速かつ簡便であり、メトヘモグロビン生成率を指標にした場合、EPA (0.1mMから1.0mMまで) 添加後2時間まで良好な直線性が得られた。なお、本法は、魚介類に含まれる乳酸等の有機酸の影響を受けないことが明らかであった。

**イオン選択電極の簡便な標準添加法の水質試験への応用—コンピュータによる検量線不要の濃度算出法—**  
日野隆信, 中西成子: 第28回全国衛生化学技術協議会年会, 1991. 10. 9, 広島市。

イオン選択性電極法はpH測定と同様に未知試料液の中に電極を入れるだけで目的のイオン濃度が測定できるので、「上水試験方法」, 「JIS K0102」, 「鉱泉分析指針」などの水質分析に広く採用されている。しかし、イオン選択性電極は連続モニターを除き日常の水質検査に積極的に使用されていないように思われる。その原因の一つとして、使用の都度試料水のイオン強度に合わせた検量線を作成し、液温を同一にして測定しなければならない煩雑さがあり、そしてこのことが測定誤差の大きな要因ともなる。従来の標準添加法ではあらかじめ検量線から電極の電位勾配を求めることが必要であったが、1970年にBrand他は標準添加で測定液の電極電位からコンピュータ計算により直接濃度を算出する方法を考案している。しかし、パンチカードでデータを入力し汎用コンピュータを共同利用する時代であったためこの方法は普及していない。手軽にコンピュータが使える現在、この標準添加法を温泉分析のフッ素イオンに適応したところ、検量線法より操作が簡易でしかも精度が非常に良好な結果が得られた。

**マダニ類の分布と植生との関係 1. フラッキング法の検討**  
角田 隆, 森 啓至, 藤曲正登: 第20回ダニ類研究大会, 1991. 11. 10~11, 神奈川県足柄郡山北町。

マダニ類の採集方法としては、宿主より直接採集する方法 (直接法) や、調査地内を布切れを持って歩き、付着した個体を採集する方法 (フラッキング法) が用いられている。我々はマダニ類の季節消長を調査する上で、フラッキング法を用いてきたが、実際にフラッキング法でとった個体数は実際に存在した個体数をどの程度定量化したものなのか、疑問であった。今回、フラッキング法の効率について検討してみたので報告する。30×16mの調査地を1mずつのグリッドに区分けした。グリッド内で最初にフラッキングを行った後、植物上にいたダニを採集した。6回に分けて行った結果、フラッキングの効率を、フラッキングでとれた個体数+植生上の個体数とすると、0.08~0.5までの間であった。植物が密集しているところでは効率は下がり、植物が疎らの所では効率が高い結果がえられた。

**房総半島南部におけるチマダニ属マダニの発生状況**  
藤曲正登, 森 啓至, 角田 隆, 林 晃史: ダニ類研究会第20会大会, 1986. 11. 10~11, 神奈川県足柄郡山北町。

千葉県南部の日本紅班熱患者発生地域を中心に、病原体リケッチアの媒介者と疑われる、マダニ類の生息分布を旗ざり法により採集・調査した。

1988~90年の調査で*Haemaphysalis*属6種、*Ixodes*属4種の合計16,249個体が採集され、*Haemaphysalis*属の*H. flava*と*H. longicornis*の2種が94%を占めた。また、採集総数の95%が、房総丘陵東部の清澄山系を中心とする東西20km、南北10kmの区域内で採集された。丘陵南部では*H. flava*と少数の*H. longicornis*、*Ixodes*属4種が採集されただけで、前記地域の*Haemaphysalis*属の発生状況と著しい違いが見られた。

紅班熱患者の発生地域とマダニの分布状況から、本症と特定のダニとの関係を推測する結果は得られなかったが、*H. ias*, *H. kitaokai*, *H. megaspinosa*の3種はこの地域からのみ採集された。

*Haemaphysalis*属マダニ類の多発地は、清澄山系のニホンシカの生息地域とほぼ一致しており、これら5種のマダニ類の生息分布は、特にシカとの寄生関係が強いことによるものと考えられる。

千葉県の学童血清における風疹抗体の経年的観察  
時枝正吉，小川知子：第28回関東甲信地区臨床衛生検査学会，1991. 12. 1. 千葉市。

風疹ウイルスの流行は、小児を中心に数年おきに全国的に患者の発生がみられるが、近年では1986～1988年に全国的な大流行があった。県内発生は1986～1987年に首都圏に隣接した東葛地区を中心に流行が認められた。そこで流行年を中心に1985～1989年の5カ年間に安房地区学童43名について血清を採取し、風疹抗体価を赤血球凝集抑制試験法を用いて、同一学童血清の風疹抗体価を経年的に測定したところ、43名中7名に抗体価の上昇を認め、この地区において風疹ウイルスの流行による感染の機会を示唆する結果を示していた。特に検査により抗体上昇を認めた7名中6名については1985年の採血血清では全員が8倍以下を示したが、流行の見られた1986年以降の血清では64倍以上の抗体価の上昇を示し、県内流行は安房地区にも波及し、風疹ウイルスの感染を受けたことを示唆していた。なおIgM抗体の検出を市販EIAキットを用いて検査を試みたが、IgM抗体の検出は出来なかった。

千葉県で分離された紅斑熱群リケッチア様の病原体について 海保郁男，時枝正吉，田中 寛：  
平成3年度稀少感染症診断技術研修会，1992. 1. 30～31. 東京都。

千葉県では、1991年に、紅斑熱患者を新たに2名、血清学的（間接蛍光抗体法）に確認した。

患者発生地は、天津小湊町と大多喜町であり、発症は共に8月であった。

*R. Japonica* YH株に対する抗体価の推移は、1例目の患者では、4病日で、IgM、IgM抗体価は共に20倍以下であり、17病日では、IgM抗体価20倍、IgM抗体価2560倍以上であった。また、*R. typhi*に対しても2560倍の抗体価が認められた。2例目の患者は、4病日で、IgM抗体価20倍、IgM抗体価20倍以下であったが、15病日で、IgM80倍、IgM320倍と、抗体価が上昇した。*R. typhi*に対しては、15病日の血清でも、20倍以下の抗体価であった。

また、これら2名の患者血液より、Vero細胞及びnude mouseを用い2株の紅斑熱群リケッチアを分離し抗原性の検討を行なった。

千葉県富山町、富浦町で発生したコレラについて  
小岩井健司，岸田一則，内村真佐子，鶴岡佳久，田中 寛：地研全国協議会関東甲信静支部細菌研究会第4回総

会，1992. 2. 20. 甲府市

1991年8月、千葉県富山町、富浦町でコレラの発生があり、7名の患者（1名死亡）が発見された。また、コレラ菌による河川、井戸水の汚染があったため、環境調査を行なった。その結果、井戸水からCT産生のコレラ菌を、河川水からCT産生のコレラ菌と共に2河川でCT非産生のコレラ菌を分離した。

ヒト由来株（いずれもエルトール小川型）の性状、薬剤感受性パターンはいずれも同一で、染色体DNAの制限酵素HindIIIによる切断パターンも同じであったことから、これらの株の由来が同一パターンである可能性が考えられた。河川由来のCT非産生株はエルトール小川型で、ヒト由来株に比較して溶血活性が高い株であった。

感染症・食中毒から分離された病原菌について  
(1991年) 岸田一則，山口マリ子，高木謙二，

小岩井健司，内村真佐子，鶴岡佳久，林 晃史，田中 寛：第30回千葉県公衆衛生学会，1992. 2. 20. 千葉市。

保健所、病院、検査所などから依頼のあった菌株について同定、血清型別、毒素産生試験等の検査を常法どおり行なった。1991年分離菌株総数は452株であった。赤痢菌：1990年12月から91年3月までY学園で赤痢菌による集団感染症が発生し、17名から、フレキシネル4a型菌が検出された。9月には、茂原市内でソネ菌による集団感染症が発生した。サルモネラ菌：下痢症の集団発生が4件（*Enteritidis* 2件，*Montevideo* 1件，*Braenderup* 1件）認められた。コレラ菌：8月から9月にかけてコレラの集団発生が認められた。患者7名から分離された菌はいずれもエルトール小川型で、PCR法によりコレラ毒素遺伝子の保有を確認した。環境調査を実施したところ9月中旬まで河川水からコレラ菌が検出された。下痢原性大腸菌：6月に建設作業所で毒素原性大腸菌による下痢症が認められた。分離された菌はST毒素を産生した。カンピロバクター菌：10月に高校の修学旅行直後（神戸市）にクラスだけ下痢、腹痛、発熱を訴えるものがあり、調査したところジェジュニ菌が検出された。

フィリピン・ボホール島の一漁村における下痢患者から分離された病原菌について 山口マリ子<sup>1)</sup>，内村真佐子<sup>1)</sup>，鶴岡佳久<sup>1)</sup>，植田育也<sup>2)</sup>，久保勢津子<sup>2)</sup>：第30回千葉県公衆衛生学会，1992. 2. 20. 千葉市。

267名の下痢患者及び一般住民について、大腸菌を中心とした腸管病原菌の検査を行ったところ、下痢原性大

腸菌が26名(10%)から分離された。これは千葉県内の散発下痢症患者からの検出率(2.2%)と比べると高い値であった。他に、サルモネラ(1.9%)、赤痢菌(1.1%)、腸チフス菌(0.4%)等が検出された。

1) 千葉県衛生研究所 2) 千葉大学医学部

**食品従事者の上気道から分離される黄色ブドウ球菌—MRSA・コアグラゼ型・毒素型の予備的調査—** 福原 誠<sup>1)</sup>、粟城久雄<sup>1)</sup>、長谷川龍男<sup>1)</sup>、小澤 等<sup>1)</sup>、高木 彰<sup>1)</sup>、岩沢俊一<sup>1)</sup>、鶴岡重子<sup>1)</sup>、木内良春<sup>1)</sup>、小泉光正<sup>1)</sup>、碧井 猛<sup>1)</sup>、小岩井健司<sup>1)</sup>：第30回千葉県公衆衛生学会，1991. 2. 20. 千葉市。

食品従事者における黄色ブドウ球菌の保菌状況を調査し、その資料を基に衛生教育を実施する目的で調査を行った。また、院内感染症の起因菌として注目されているMRSAの保菌状況についても調査した。

黄色ブドウ球菌は1439名中417名(29.0%)から分離された。業種別の保菌者についてみると食肉、魚介類あるいは乳類等の販売に携わる従事者の保菌率が高い傾向を示した。食中毒から分離される黄色ブドウ球菌のコアグラゼ型はII, III, VI, VIIに偏る傾向があるが、今回の調査におけるその割合は74.5%と高く、食中毒の原因菌となる可能性を示唆した。MRSAの保菌者は15名(1%)であった。

1) 千葉県館山保健所 2) 千葉県衛生研究所

**酵素抗体法(ELISA法)による伝染性紅斑の確認** 小川知子、海保郁男、山中隆也、時枝正吉、北橋伸一、市村 博、青山智子：第30回千葉県公衆衛生学会，1992. 2. 20. 千葉市。

伝染性紅斑の診断は、現在臨床症状によるところが大きい。今回、伝染性紅斑と診断された小児血清4例、家族内感染が疑われた血清2例、一般外来に受診した小児血清8例を用いて、酵素抗体法を実施した。

伝染性紅斑と診断された小児血清4例および家族内感染が疑われた血清2例について、IgM抗体はすべてに、IgM抗体は4例に確認できたが、抗原については全例陰性であった。また一般外来の小児血清8例については、IgM、IgM抗体、抗原ともすべて陰性であった。

伝染性紅斑は、前駆症状として「軽い風邪」症状がみられ、特徴的な発疹があらわれて感染に気づく場合が多いが、発疹の出現時には抗体は既に上昇し、ウイルスの排泄は終わっている。今回の調査では、抗原を検出することはできなかったものの、酵素抗体法を用いることにより、早期診断が可能であると考えられた。

**冬季に発生したウイルス性胃腸炎の集団発生** 篠崎邦子<sup>1)</sup>、山中隆也<sup>1)</sup>、時枝正吉<sup>1)</sup>、酒井利郎<sup>2)</sup>：第30回千葉県公衆衛生学会，1992. 2. 20. 千葉市

1990年12月初め、船橋保健所管内N幼稚園において、嘔吐、発熱、下痢を主訴とした急性胃腸炎の集団発生がみられた。患者発生は、12月3日から始まり、5日、6日の2日間に患者全体の90%が発症し、8日に終息した。患者は、年少から年長までの園全体でみられ、発病率は474名中304名、64.1%と高かった。臨床症状は、嘔吐が76.3%と最も高率にみられ、1日5回以上の程度の強いものが多かった。発熱は、48.4%にみられ38℃以上の高熱が多くみられた。電子顕微鏡によるウイルス検索では、ふん便24検体中11検体からSRVを検出した。ウイルス粒子の多い患者便を抗原として免疫電顕法を行ったところ、便と血清の採取できた11名中6名、血清のみの7名中5名に明らかな抗体上昇が認められた。うがい液、ふん便のウイルス分離陰性、血清反応ではインフルエンザ、アデノの感染は否定された。以上の結果から、今回の集団発生はSRVによるものと考えられた。

1) 千葉県衛生研究所 2) 千葉県中央食肉衛生検査所

**血清学的診断法で確認された野兎病患者の一例について** 時枝正吉<sup>1)</sup>、海保郁男<sup>1)</sup>、堀部寿雄<sup>2)</sup>、安井成美<sup>3)</sup>、上田 侃<sup>1)</sup>：第30回千葉県公衆衛生学会，1992. 2. 20. 千葉市。

過去において人獣(畜)共通感染症の代表的な野兎病は本県はもとより、秋田、岩手、新潟、静岡、等の各県に広く分布し、特に昭和20年代は本県において患者発生数は50名以上を数えていたが、近年では患者数は激減し、稀有な感染症になりつつある。今回、茂原保健所管内において野兎病患者を臨床的及び血清学的診断法にて確認したので、その経過について報告する。血清学的診断法は福島県大原総合病院附属研究所に依頼して検査を実施した。検査方法は菌凝集試験管法と菌凝集マイクロプレート法及び間接赤血球凝集法を用いて実施し、第一回目採血1992年2月7日では各々10倍以下陰性、第2回目採血2月18日では菌凝集法、試験管法にて各40倍、マイクロプレート法320倍、間接赤血球凝集法160倍と3法ともに抗体価の上昇を認めた。臨床所見では野兎を捕獲解体後、数週間に発熱し、左腋下痛の症状を呈し、リンパ腺腫脹し、テトラサイクリン投与後治癒した。病型は淋色腺及び類チフス型と判定され野兎病と診断した。

1) 千葉県衛生研究所 2) 三井東洋化学健康管理室  
3) 千葉県習志野保健所 4) 千葉県茂原保健所

**県南地域におけるツツガムシの分布調査について (第5報) 長生地域の採集成績** 藤曲正登, 森 啓至, 角田 隆, 林 晃史: 第30回千葉県公衆衛生学会, 1992. 2. 20. 千葉市.

県内の恙虫病流行地は館山・鴨川・勝浦保健所管内にはば限定され, 疫学上媒介種として重要なタテツツガムシの分布ともよく一致していた。昭和61年秋以降5年間に, 茂原保健所管内(長生地域)で16名の患者が報告され, この地域の媒介種の特定が疫学上重要な課題となった。

S62~H3に長南, 睦沢, 一宮, 長生4町村で捕獲した23頭の野鼠から3属7種(タテツツガムシ, フトゲ, フジー, キタサト, ミタムラー, ヤマト, サダスクーガーリエビ)956個体のツツガムシ幼虫が採集され, 最多出現種はフジツツガムシ(41.0%)だった。

フトゲツツガムシ(3.8%)とタテツツガムシ(1.3%)は患者発生地地の長南, 一宮両町で採集され, 特に一宮町では優占種となり洲崎から太東崎にかけての, 外房の流行地が九十九里地域まで連続しているものと考えられる。長南町では少数のタテツツガムシとフトゲツツガムシと混在することで夷隅川上流部の内陸部のツツガムシ生息状況と共通する傾向が見られたが, 長生地域の患者発生時期が他地域と同じく10~12月に集中しタテツツガムシの発生時期とよく一致することから, 流行に關与するタテはタテツツガムシと推定される。

**ゴルフ場使用農薬の分析法の検討(高速液体クロマトグラフィー測定項目について)** 中山和好, 小室芳洵: 第30回千葉県公衆衛生学会, 1992. 2. 20. 千葉市.

厚生省通知の高速液体クロマトグラフィーで測定する5農薬(アシュラム, オキシ銅, チウラム, イプロジオン, ベンスリド)とGC-MSで測定となっているメチルダイムロンの同一移動相, 同時分析の条件を求めた。また, 前処理として, 固相抽出法を検討した。

分離カラムには, 比較的安価なポリマータイプのODSカラムを用い, 移動相の検討結果, アセトニトリル:水=43:57(pH4)が各物質の分離に適當であった。アシュラム, オキシ銅, チウラム, メチルダイムロン, イプロジオン, ベンスリドの順に分離されベンスリドまで20数分であった。

固相抽出法ではウォーターズ社のSep Pak Plus PS-1を用いた。地下水に標準物質を添加し回収率を求めた結果, 70%以上であった。多量の有機溶媒を使用せず, 簡便な処理法であった。

**最近話題のウイルス感染症** 時枝正吉: 第13回千葉県臨床衛生検査学会特別講演, 1992. 3. 8, 君津市.

ウイルス感染症として最近注目されている, エイズをはじめC型肝炎, 突発性発疹症(ヘルペス6型), 伝染性紅斑(パルボB-19型)等における患者発生及び流行状況はもとより, 検査耐性の現状について解説した。

特に1990年以降の伝染性紅斑の県内流行において患者の血清診断は16検体中4検体陽性(ELISA法)でIgM及びIgM抗体を測定したがIgMM及びIgM抗体陽性でウイルス抗原は検出出来ず血清診断用抗原確保は出来なかった。検査技師会を通じ患者血液の入手及び診断用抗原確保について協力を依頼した。